慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西太一宮をお祀りする : 北宋の官僚文人の生活と文学
Sub Title	Rituals at Western Taiyi Shrine : lives and literature of literati bureaucrats in the North Song era
Author	村越, 貴代美(Murakoshi, Kiyomi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.10 (2017.) ,p.1- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関根謙教授退休記念号
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20170331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西太一宮をお祀りする

——北宋の官僚文人の生活と文学

村越貴代美

はじめに

北宋の哲宗元祐元年（一〇八六）秋、都の西太一宮で祭祀が行われた。当時、蘇軾と黄庭堅はともに都にいて、蘇軾は「奉勅祭西太一和韓川韻四首」を作り、黄庭堅は「次韻韓川奉祠西太一宮四首」を作った。いずれも韓川の「奉祠西太一宮四首」（散逸）に和したもの。韓川は監察御史として行香使の役目を仰せつかり、奉祠した。韓川は『宋史』巻二四七に伝がある。

蘇軾（一〇三七～一一〇一）と黄庭堅（一〇四五～一一〇五）の詩は、それぞれの集に残っている。ほかに張耒[1]にも「和子瞻西太一宮祠二首」がある。王安石（一〇二一～一〇八六）には「題西太一宮壁二首」「西太一宮楼」があり、蘇軾が「西太一見王荊公旧詩偶次其韻二首」を作り、黄庭堅も「次韻王荊公題西太一宮壁二首」を作った。

王安石、字は介甫、号は半山、臨川（江西省撫州市）の人。科挙に合格し進士となった後、地方官を歴任していたが、熙寧年間に政治改革を訴えた上奏文が注目されて翰林学士に抜擢され、ほどなく宰相となって新法を実施する。しかし改革に反対する勢力もあり、王安石らを新法党、反対派を旧法党と見なして、両党の争いが北宋末まで続く。欧陽脩や司馬光、程顥、蘇軾・蘇轍兄弟、黄庭堅らは、旧法党である。

新旧両党の争いは長くかつ複雑で、どの時点に誰の立場から見るかで様相が変わってくるかと思われるが、筆者の関心はもともと宋詞の集大成者とも称される周邦彦（一〇五六～一一二一）が、神宗の時代に抜擢されて、以後、新法党の一員として生涯を浮沈したことにあった。王安石の新法が施行されたのが神宗の熙寧二年（一〇六九）、周邦彦が新法による政治改革を称賛する内容の「汴都賦」を献上したのが元豊六年（一〇八三）、翌元豊七年（一〇八四）に太学生から太学正に抜擢されて官途を歩み始めたが、その翌年の三月に神宗が三十八歳で崩御し、哲宗が十歳で即位、太皇太后高氏が垂簾政治を行い、新法を廃止する。周邦彦は元祐年間の二年春、都を出され、廬州教授に赴任した。入れ替わるように都へやってきたのが、蘇軾門下の人々とされる。

とくに黄庭堅に注目してみると、蘇軾と知遇を得たのが神宗の元豊元年（一〇七八）、この年、黄庭堅は北京（今の河北省大名府）で国士監教授を勤めていた。三十四歳。「古風（一作古詩）二首」を作り、蘇軾に送って、称賛された。この頃、王安石の新法に反対する立場の人々は、たとえば欧陽脩は致仕を願い出て潁州（今の安徽省阜陽）に隠棲し、蘇軾は杭州通判に左遷され、弟の蘇轍も地方へ左遷され、司馬光は洛陽へ去って『資治通鑑』の編纂に専念していた。黄庭堅が蘇軾に送った「古風二首」は、梅や松に託して蘇軾を誉め、いまは時節が適っていないだけであり、

但使本根在　　但だ本根をして在らしめば
棄捐果何傷　　棄捐せらるるとも　果して何ぞ傷まん

根元さえしっかりしていれば、棄てられても少しも悲しむことはありませんよ、と蘇軾を慰めている（「古風二首」其一）。王安石自身は息子の王雱を亡くしたこともあり、熙寧十年（一〇七七）に致仕、隠棲していた。

元豊八年（一〇八五）三月、神宗が崩御する。司馬光ら旧法党が都に呼び戻され、青苗法・募役法など新法を次々に廃止した。江寧に隠棲していた王安石は大いに嘆いたというが、翌元祐元年（一〇八六）四月、江寧で死去した。また司馬光も同じ年の九月に死去し、新法・旧法ともにリーダーを失い、以後、政策をめぐる論争というよりは、苛烈な権力闘争へと堕していく。

哲宗も元符三年（一一〇〇）に二十四歳という若さで崩御し、哲宗の弟である端王趙佶が即位して徽宗となる。当初垂簾政治を布いた向太后は新旧両党の融和を図ろうとしたが、一年後に急死し、徽宗の親政が始まる。蔡京が寵愛されるようになってからは、旧法党に大弾圧を加え、崇寧元年（一一〇二）、司馬光ら旧法党の百十九人（後に三百九人に増えた）を元祐姦党と称して石に刻み、宮殿の側に建てさせた（元祐党籍碑）。さらに旧法党の人々の書いた詩文は、発禁処分となった。

海南島まで追放されていた蘇軾は、融和が図られた時期に赦されて都へ戻る途中で客死し、黄庭堅は崇寧二年（一一〇三）に讒言を受けて宜州（今の広西チワン族自治区）へ流刑となり、崇寧四年九月三十日、その地で病没した。名誉が回復されたのは、南宋の度宗の時代である。文節の諡号が贈られた。

崇寧四年というのは、前年に道士魏漢津が主張した律の算出方法が採用され、九鼎を鋳造した年である。七月、

魏漢津律による九鼎（帝鼎と八鼎）が鋳造され、八月二十六日、劉昺（後に大晟府の大司楽に就任する）の説に従って新楽が制作され、崇政殿で百官に九鼎と九鼎楽が披露された。翌日、新楽に「大晟楽」の名が与えられると共に、大晟楽を管理する機関として大晟府が置かれた。後に周邦彦が提挙（長官）に任ぜられた。

大晟府設立を推進した蔡京の子、蔡絛が九鼎鋳造の玄妙さと華々しい披露の様子を『鉄囲山叢談』巻一に記している。

> 崇寧甲申議作九鼎、有司即南郊為冶、用中夜、時上為致粛不寐、至是於寝望之、焚香而再拝焉、既乃就寝、傍四鼓矣。忽有神光達禁中、政燭福寧殿、紅赤異常。宮殿於是尽明如昼、殆暁始熄。鼎一鋳而成、廼取佑神観旁地立九成宮、随其方為室、成九室以奠鼎、命魯公為奉安礼儀使。又方其講事也、輒有群鶴幾数千万飛其上、蔽空不散。翌日上幸之、而群鶴以千餘又来、雲為変色、五彩光艶。上亦随方入其室、焚香為再拝、従臣皆陪祀於下。

崇寧甲申（三年＝一一〇四年）に九鼎の鋳造が議論され、有司（官吏）が南郊外で冶金した。夜中になっても、天子は身を正したまま寝宮で待ち、香を焚いて再拝した。就寝した時は四鼓（午前二時）に近かった。たちまち神々しい光が禁中に達し、福寧殿は燭を採ったように異常に赤くなった。宮殿は昼のように明るく、明け方になってようやくその光は止んだ。完成した鼎は、佑神観のそばの土地を選んで九成宮を建て、各方角に九室を作って奠定され、魯公（蔡京）が奉安礼儀使（九鼎を安定するお役目）に命じられた。事の次第を述べるや、たちまち鶴の群が数千万もその上を飛び、空をおおって去らなかった。翌日天子が幸臨されると、群鶴はまた千羽以上も飛来し、雲の色が変わり五色の光が輝いた。天子は方位に従って室に入り、香を

焚いて再拝し、臣下もみな続いて参拝した。

都で華々しいパフォーマンスが繰り広げられていた頃、黄庭堅は流罪人として家族と離れ、宣州で寂しく病んでいた。崇寧四年正月元日から八月二十九日まで、六十一歳で亡くなる約一ヶ月前までの日記「宣州乙酉家乗」を黄庭堅は残しているが、庇護してくれる友人がいて、手紙や送り物をしばしば受け、怒りや怨みは見えず、淡々と日々を過ごしているものの、八月に入ると天候だけを「晴」と記すことが多くなった。最後の日の日記も、「晴」の一字である。

未来を見通せるはずはもちろんなく、周邦彦と黄庭堅が北宋の政争に巻き込まれてコインの表と裏のような生涯を送ったのも偶然であるが、こうした時代背景を踏まえた上で、元祐元年（一〇八六）秋の西太一宮での祭祀前後に作られた詩を読むと、宋代のいわゆる「官僚文人」の生活がいかなるものであったのか、とくに「官僚」部分の一端が垣間見えるように思える。

西太一宮でお祀りをした元祐元年（一〇八六）秋、神宗は前年三月に崩御して哲宗の親政が始まり、王安石は四月に亡くなっていて、都に呼び戻された司馬光はまだ存命であり、苛烈な権力闘争の前夜とも言うべき時期であった。黄庭堅は旧法党とされたが、「神宗皇帝挽詞三首」「王文恭公挽詞二首」を作り、蘇軾にも「神宗皇帝挽詞三首」がある。後に司馬光が死去すると、黄庭堅は「司馬文正公挽詞四首」も作った。新旧両党の争いが、まだそれほど先鋭化していなかった時期である。

政治的な見解が対立していても、文学者としては互いに一目置いていたといわれる王安石、蘇軾、黄庭堅らの交流の様子を、作品を通して見てみたい。

一、西太一宮について

太一（太乙、泰一）は太一星、北辰（北斗、北極星）のこと。太一に対する信仰は古く、楚国においては最上位の神だった。

楚辞「九歌」の最初の歌として、「東皇太一」がある。以下、藤野岩友氏の解釈[2]に従って少し丁寧に「東皇太一」を見てみると、まず「東皇」とあるのは楚の都の東に祠があり、東の天帝に配（あわ）せ祀ったからである。偉大な唯一の神として、これを「太一」と呼び、福祥を祈った。巫女により上演された神舞歌劇の歌詞を、若い頃の屈原が作詞したとされる。

冒頭は、主祭者による祭りの始まりの挨拶。

吉日兮辰良、　　この吉日、この良き時、
穆将愉兮上皇。　　謹んで神を歓ばせ奉ります。

続いて巫女たちが唱う。主祭者の剣を捧げて拝礼。

撫長剣兮玉珥、　　長剣の玉の柄頭（つかがしら）を撫でつつ拝礼を行うと、
璆鏘鳴兮琳琅。　　チリンチリンと琳琅（佩玉（おびだま））が鳴り響く。

神坐の奉納。

瑤席兮玉瑱、
盍将把兮瓊芳。

玉の敷物、玉のおさえ、
美しく芳しい花の枝を手にとり、さあ舞い出でよ。

供え物の奉納。

蕙肴蒸兮蘭藉、
奠桂酒兮椒漿。

蕙（蘭の一種）の肉粽、蘭を敷き、
肉桂の酒と山椒の飲み物も、お供えした。

楽舞の奉納。

揚枹兮拊鼓、
疏緩節兮安歌、
陳竽瑟兮浩倡。

バチをあげ、鼓を打ち、
拍子はゆるく、しずかに歌い、
竽（ふえ）と瑟（こと）をならべて、盛んに歌う。

神の降臨。

霊偃蹇兮姣服、　霊（神の憑依した巫女）はしなやかに舞い、衣装も美しく、
芳菲菲兮満堂。　手にした花の香りが、神堂に満ちる。
五音紛兮繁会、　音楽が鳴り響けば、
君欣欣兮楽康。　神はよろこび、楽しみ安んじたまう。

「九歌」は、「東皇太一」のほか「雲中君」「湘君」などで構成されるが、最高神である東皇太一は、天上の四神（雲中君・大司命・少司命・東君）と地上の四神（河伯・湘君・湘夫人・山鬼）を従えて、風雨や水害、旱魃、飢饉、疫病などをつかさどる。そこで歌や踊りでもてなして、災いを避けるのである。

漢代になると、北極星は天帝太一神の居所であり、北極星を中心とする星座は天上世界の宮廷であると考えられるようになり、紫宮や紫微宮とよばれた。『淮南子』に「紫宮者、太一之居也（紫宮は、太一の居なり）」とあり、『史記』「天官書」に「中宮、天極星、其一明者、太一常居也（中宮に天極星あり、其の一の明なる者には、太一常居するなり）」とある。

漢の武帝は方士謬忌の建議を受け入れて、太一を五帝の上に置き、太一壇をつくって天一・地一・太一の三神を祀った（『史記』「封禅書」）。後漢・鄭玄は太一を北辰の神の名と考え、『周易乾鑿度』の注でさらに、八卦に配当された九つの宮殿（九宮）を順次めぐっていく「太一九宮の法」を記した。

唐代になると、天の九宮（太一・摂提・軒轅・招揺・天符・青竜・咸池・太陰・天一）を九神が支配し、北辰にいる太一神が易の八卦に配当された九宮を巡行するにともない、九宮それぞれに対応する地上の九つの分野（冀州・荊州・青州・徐州・豫州・雍州・梁州・揚州・衮州）に水害や旱魃、兵乱、政変などの災厄が生じるとされ、

朝廷では太一神の巡行を推算し、九つの宮殿（九宮貴神壇）を設けて春と秋に大規模な祭祀をおこなった[3]。

巡行する順序は、図[4]のとおり。八卦に配当された地の八宮を巡行し、四宮ごとに中央に帰る。

宋代になっても「九宮貴神」は盛んに行われたが、これに同じく太一神を祀る「十神太一」が加わり、しばらく併用された。哲宗の元祐年間に「両者は異なった祭祀で神の職掌も異なる」との議論が出て、以後は分離された。

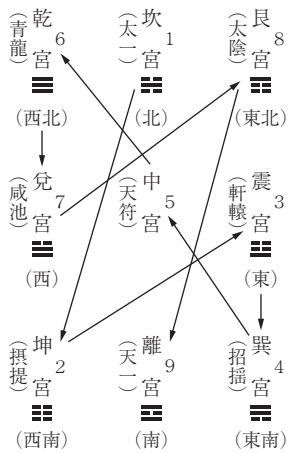
十神太一は、宋・沈括『夢渓筆談』によれば、一から十まで順に「太一」「五福太一」「天一太一」「地太一」「君基太一」「臣基太一」「民基太一」「大遊太一」「九気太一」「十神太一」で（十神の名称は諸説あり）、「五福太一（太乙）」が臨む地には、兵災や疾病が生じないとされた。

五福太一は、巡行して四十五年ごとに一宮進む。太宗の太平興国六年（九八一）、三年後に五福太一が黄室巽宮、すなわち呉越の分野に臨むということで、蘇州に太一宮を築いて祀った。しかし都から遠く、天子が親しく謁するに不便なので、同じ方角で都に近く、蘇州の名にちなんだ蘇村に太一宮を建てよと建言する者がいて、採択された。以後、都に太一宮を建てることになった。かくして四十五年ごとに建てた太一宮は、以下のとおり（計画から完成までにそれぞれ二〜三年を要している）。

太平興国六年（九八一）　蘇州に太一宮を作る。

太平興国八年（九八三）　太一宮（都城南、蘇村）、後の東太一を作る。

天聖六年（一〇二八）　西太一宮（都城西南、八角鎮）を作る。



九宮貴神配置・遷位図

熙寧四年（一〇七三）　中太一宮（都城内）を作る。
政和八年（一一一八）　北太一宮（都城西北隅）を作る。

西太一宮には十神が祀られ（『玉海』巻一〇〇）、前殿に五福・君基・大遊の三太一が祀られた（宋・宋敏求『春明退朝録』）。

「九宮貴神」と「十神太一」は、お祀りする時期が異なる。

「九宮貴神」は、春秋（春秋二仲）に祀る。「十神太一」は、毎年の四立日（立春・立夏・立秋・立冬）に百官を遣わし、「昏から朝まで」祀った。宋・龐元英『文昌雑録』巻四に、「立春、祭東太一宮。立夏、立冬、祭中太一宮。立秋、祭西太一宮（立春、東太一宮を祭る。立夏・立冬、中太一宮を祭る。立秋、西太一宮を祭る）」とある。

太一神は風雨水旱を職掌とするので、雨乞いをしたり、祈りが届いて雨が降った場合にはお礼をした。春の例として、『宋史』仁宗本紀に「（慶暦七年三月）辛丑、祈雨於西太一宮、及還遂雨。（嘉祐七年三月）乙丑、祈雨於西太一宮（慶暦七年［一〇四七］の三月辛丑、雨ふるを西太一宮に祈り、還るに及んで遂に雨ふる。嘉祐七年［一〇六二］の三月乙丑、雨を西太一宮に祈る）」とあり、雨が降ったお礼の記録として、『玉海』巻三十に「慶暦七年春旱。……（三月）辛丑、幸西太一宮祈雨。……四月丁未、幸西太一宮、謝雨。壬子、御殿復膳、又賜喜雨詩一章、以勉之（慶暦七年春、旱たり。……三月辛丑、西太一宮に幸し雨ふるを祈る。……四月丁未、西太一宮に幸し、雨ふるを謝す。壬子、御殿にて復た膳し、又た喜雨詩一章を賜い、以て之を勉す）」、『玉海』巻一〇〇に「嘉祐七年三月乙丑、祈雨。庚午、謝雨。宋祁作太一新宮頌（嘉祐七年三月乙丑、雨ふるを祈る。庚午、雨ふるを謝す。宋祁、太一新宮頌を作る）」とある。(5)

このような儀礼（斎醮）で使用される祈禱文を、青詞という。斎は、ものいみ。醮は、災厄を消除する方法の一

つで、夜中に星空の下で酒や乾肉などの供物を並べ、神を祭って文書を上奏する儀礼。青詞は、道士が作ることもあるが、文人官僚が作ることもあった。詩文集からは削られる傾向にあったというが、欧陽脩に五十一首、王安石に二十六首、蘇軾に十七首の青詞があるという[6]。

黄庭堅にも「祈雨青詞」があり、また「祈雨文三首」「玉山祈雨文」などもある。

以上、西太一宮が天聖六年（一〇二八）に建てられたこと、お祀りは毎年立秋の日に行われ、とくに雨を祈願することが多かったこと、祈禱文（青詞）を文人官僚も書いたこと、雨が降るとお礼に詩を作ったこと、などが分かった。

元祐元年（一〇八六）の西太一宮での祭祀に関係した人物として、まず韓川は、哲宗の元祐元年（一〇八六）三月に監察御史となり、行香使の役目をつとめた。「奉祠西太一宮四首」を作ったが、その詩は伝わらない。蘇軾と黄庭堅が韓川の詩に次韻し、張耒は蘇軾の詩に次韻した。

司馬光が復権し、旧法党とされて地方へ出されていた人々を都へ呼び戻し、黄庭堅が都に着いたのは前年の九月、秘書省校書郎となる。蘇軾は十月に礼部郎中を以て召還すると知らせを聞いたが、各地をめぐって、都へ着いたのは十二月。この前年には金陵（今の南京）に隠棲している王安石を訪ねて「次荊公韻四絶」を作っている。

以下、年表風にまとめると[7]、

元祐元年（一〇八六）正月、蘇軾は七品の服を以て延和殿に侍し、銀緋を賜った。

正月、蘇軾と黄庭堅、はじめて顔をあわせる。詩のやりとりは以前からあった。

三月十四日、蘇軾、中書舎人となる。

四月六日、王安石が亡くなった。

六月十六日、黄庭堅・張耒（ら九人）学士院考試、主考官は蘇軾。
七月立秋、西太一宮を祀る。
九月一日、司馬光が亡くなった。
九月十二日、蘇軾、翰林学士となる。

二、黄庭堅の「次韻韓川奉祠西太一宮四首」

まず黄庭堅の「次韻韓川奉祠西太一宮四首」を、一首ずつ見ていく。[8]

其一

万霊未対甘泉、　万霊　未だ甘泉に対せず
五福間祀迎年。　五福　迎年を間祀す
旍旗三旆半偃、　旍旗の三旆　半ば偃し
風馬雲車闖然。　風馬　雲車　闖然たり

天子さまは黄帝のように神々を甘泉にお迎えするのではなく、五福太一だけを祀って豊年をお祈りになる。
霊旗のはたあしが半ばなびいて、神は不意に、風馬雲車に乗って降臨された。

「万霊」は神々。「甘泉」は、太一（泰一）を祀った場所。長安の都の西北、甘泉山に秦の始皇帝が造った離宮

（林光宮）があり、これを武帝が拡大した。『漢書』「郊祀志上」に、次のようにある[9]。

> 亳人謬忌奏祠泰一方、曰、「天神貴者泰一、泰一佐曰五帝。古者天子以春秋祭泰一東南郊、日一太牢、七日、為壇開八通之鬼道。」於是、天子令太祝立其祠長安城東南郊、常奉祠如忌方。……斉人少翁以方見上。……又作甘泉宮、中為台室、画天地泰一諸鬼神、而置祭具以致天神。……其後又作柏梁、銅柱、承露仙人掌之属矣。

亳県の謬忌が泰一を祀る方法について奏上した、「天の神々でもっとも貴いのは泰一です。泰一を補佐するのが五帝です。いにしえは、天子は春と秋に東南の郊外で泰一をお祭りし、毎日一匹ずつ太牢（牛羊豚の犠牲）を七日間そなえて、祭壇を築いて神霊のために八本の道を開きました」と。そこで天子（武帝）は太祝の官に、長安の東南の郊外に祠を建てさせ、いつも謬忌のやり方に従ってお祀りした。……（のちに）斉の少翁が方術によって天子に見えた。……また甘泉宮を造り、中に高台のある部屋を設け、天一・地一・泰一などもろもろの神々を描き、祭祀の品々をそろえて天の神を招き寄せようとした。……のちにまた柏梁台の銅柱や承露仙人掌などを造った。

はじめ長安の東南の郊外に祠を建てて祀っていたが、方士たちに言われるがままに、徐々に大掛かりになっていった様子が分かる。

「万霊未対甘泉」に対して、黄庭堅の弟子の任淵は、『漢書』「郊祀志」に「黄帝接万霊於明庭。明庭者、甘泉也（黄帝万霊を明庭に接す。明庭は甘泉なり）」とあり、また「武帝定郊祀之礼、祀泰一於甘泉、就陽位也（武帝郊祀の礼を定め、泰一を甘泉に祀る。陽位に就けるなり）」とある、と注をつけている。それぞれ引用されている文の

前後を読むと、泰一を祀る目的は、天子が不老長寿を得るためであった。武帝は「ああ本当に黄帝のようになれるなら、妻や子を棄てるのは草履を脱ぎ捨てるようなものだ（嗟乎、誠得如黄帝、吾視去妻子如脱屣耳）」と嘆いているのだが、儀式のやり方など興味深いので、少し長くなるが訳文[10]だけ引用する。

（斉の公孫卿が武帝の質問に答えて、斉の申公の説を述べるには）「漢の皇帝もやはり泰山に登って封禅をとり行うべきです。封禅すれば仙人となって昇天することができます。……黄帝は戦争をする一方、仙術を学び、民衆が彼の行為を非難することを懸念し、そこで鬼神を非難するものをきり殺しました。それから百余年を経過したあとで、神と通じることができました。……黄帝は八百万の神々と、明庭の地で接せられました。明庭とは甘泉のことですし、黄帝の昇仙された寒門の地は仲山の谷口であります。黄帝は首山から銅を採って、鼎を荊山のふもとで鋳造されました。鼎が完成すると、あごひげを垂した龍が下って来て、黄帝を迎えました。龍はそこで飛翔しました。その他の身分の低い家来たちは龍に乗ることができず、そこで誰も彼も龍のひげにしがみつきました。龍のひげが抜けて墜落し、黄帝の弓を落としました。人々はそれを仰ぎ見ていました。……」

……（天子は）また甘泉に行幸し、祠官の寛舒らに泰一神の祭壇をととのえさせた。その祭壇は薄（亳）県、謬忌の泰一神に倣い、壇は三重であった。五帝の祭壇は環状にその下に置かれ、それぞれその方角の通りに（赤帝は東というように）配された。黄帝の祭壇は西南に置かれ、八本の神霊の通路は避けた。泰一神のお供えは、雍の供え物のようにし、にごり酒・棗・ほし肉の類を加え、一頭の騶牛（かうし）を殺して、祭器に盛る犠牲の品とした。……

祠（まつり）が終れば、お下がりの酒肉はみな火を入れられた。牛の色は白で、白鹿を牛の中に入れ、彘（こぶた）は鹿の中に置き、鹿の中には水と酒を入れた。太陽を祭るには牛を用い、月を祭るには羊か彘を用いた。泰一神の祭主は紫色で縫取りのある着物を着た。……

十一月辛巳は朔日で冬至にあたる。天子は夜明け前に初めて郊の祭で泰一神を拝され、朝になると太陽を拝し、夕方には月を拝し、うやうやしく拝礼された。泰一神にまみえるには、雍の郊の礼のようにされた。その祝詞には、「天、はじめに宝鼎とめとぎを皇帝に授けられた。はじめに朔ありて、今また朔、天の周期は一巡して終り、再び新しい周期が始まる。皇帝つつしみて拝見せられよ」とあった。そして衣服は黄色を尚んだ。その祭りでは火の列が祭壇一杯に満ち、傍には調理の道具が置かれた。担当の役人は、「祭祀の時、上空に光がありました」といい、大臣たちは、「皇帝がはじめて泰一神を雲陽で郊見され、係りの役人が六寸の璧とめでたきよき牛を供えて祭ると、その夜美しい光があらわれ、昼になると黄気がのぼって天につらなりました」といった。太史令の司馬談と祠官の寛舒らは、「大いなる神の霊が福（さいわい）のよきしるしを下されています。この土地の光があらわれた区域に、伏羲の祭壇（泰畤）をつくり、瑞祥にはっきりと答えるべきです。太祝の官に管理させ、秋と十二月にお祭りをし、二年に一度、天子が郊の祭りをされるべきでしょう」と申し上げた。

黄庭堅の詩の二句め「五福間祀迎年」について任淵は、「詩意謂皇家未接万霊、而特祀五福、以為民祈年之故爾。五福謂五福太一、蓋十神之一。太一金鏡経具載其詳（詩の意味は、哲宗はもろもろの神はお迎えせず、とくに五福だけを祀り、民のために豊年を祈っているというのである。五福とは、五福太一のこと、十神の一つであろう。唐・王希明『太一金鏡式経』にその詳細がもれなく記載されている）」と注をつけている。「間祀」の注には、『漢

書』「郊祀志」の「立泰畤壇（泰畤を壇に立つ）」「秋及臘間祠（秋及び臘に間祀す）」を挙げているが、これはいま長々と引用した最後の部分、太史令の司馬談らが奏上したものである。

したがって「万霊未対甘泉、五福間祀迎年」の言わんとすることは、太一が漢代の泰一の祀りを起源としつつも、武帝が不老長寿を得た黄帝を羨んで甘泉で多くの神々を迎えようとしたのとは異なり、いまの天子哲宗は五福太一だけをお祀りして、豊年を祈願された、ということであろう。「迎年」は「祈年」に同じ、豊年を祈ること。任淵注に、『漢書』「郊祀志」の「黄帝為五城十二楼、以候神人、名曰迎年（黄帝は五城十二楼を為り、以て神人を候つ。名づけて迎年と曰う）」を引く。

続く「旍旗三旆半偃、風馬雲車闖然」は、旗をなびかせ、風馬雲車に乗って神が降臨された様子。楚辞「東皇太一」にあったように、儀式が始まって、歌や舞を交えながら神を迎えるのであろう。任淵はここでも、「旍旗三旆」の注に『漢書』「郊祀志」の「為伐南越、告禱泰一、以牡荊画幡、象泰一三星、為泰一鋒旗、命曰霊旗（南越を伐つ為に、告げて太一に禱る。牡荊を以って幡に画き、泰一三星を象り、泰一の鋒旗と為し、命して霊旗と曰う）」や、「風馬雲車」の注に『漢書』「礼楽志」の「郊祀歌曰、霊之車結玄雲、霊之下若風馬（郊祀歌に曰く、霊の車は玄雲に結ばれ、霊の下るや風馬の若し）」などを引く。

其二

白髦下金神節、　白髦　金神の節を下し
青祝携御爐香。　青祝　御爐の香を携う
百礼尽修毫祀、　百礼　尽く毫祀を修め

九歌不取沈湘。　九歌　沈湘を取らず

白毛の西方秋の神（に扮した者）が印をお下しになり、青詞に天子の薫香を炊き込めて太一神に奉納する。諸々の儀礼は漢の亳県の人（謬忌のこと）のやり方で盛大に行われ、「九歌」が歌われるが、湘水に身を沈めた屈原の思いはとらない。

「白髦」は、任淵注に『国語』「晋語」の「虢公夢在廟有神、人面白毛虎爪、執鉞立於西阿。公覚召史嚚占之。対曰、如君之言、則蓐収也（虢公夢みらく、廟に在りて神有り、人面・白毛・虎爪にして、鉞を執りて西阿に立つ。公覚めて史嚚を召して之を占わしむ。対えて曰く、君の言の如くんば則ち蓐収なり）」を引く。蓐収は西方白虎を象徴し、古の秋官。「金」も五行で秋に配当される。西太一宮のお祀りは立秋に行われたので、「白髦下金神節」で秋を象徴する言葉を用いた。

続く「青祝携御爐香」は、色彩的に白と青が対になり、神と神に奉仕する人（具体的には韓川）とが対になる。任淵注に、「青祝謂内出青詞、以香熏之乃授祠官、使祭告也（青祝は、内制の青詞を香で熏じ、祠官が奉納して神に申し上げることを言う）」とある。

「百礼」は、任淵注に『詩経』「賓之初筵」の「以洽百礼（以って百礼を洽す）」を引く。光りかがやく祖霊を楽しませようと、あらゆる供物を合わせ整えること。「亳祀」は、漢の武帝に泰一神を祀るやり方を伝えた亳人繆忌のこと。

「九歌」は、楚辞の「九歌」。ここも「百礼」ときれいな対になっている。「沈湘」は任淵注に『文選』所載の魏・李康「運命論」に「屈原以之沈湘（屈原は之を以て湘に沈む）」とあるのを引く。屈原は湘水に身を投げた。

「九歌」に「東皇太一」があり、それにならった歌や舞があったのだろう。ただし入水した屈原の憂愁を採るわけではない。

其三

紫府侍臣鳴玉、　紫府の侍臣　玉を鳴らし
霜台御史生風。　霜台の御史　風を生ず
官燭論詩未了、　官燭　詩を論じて未だ了らず
知秋自属梧桐。　秋を知るは　自ら梧桐に属す

天神の住まう紫府の侍臣（中書舎人蘇軾のこと）が歩くと腰の佩玉が鳴り、御史台の御史（韓川のこと）が筆を執ると筆先には風がたつ。官燭をともして詩をいつまでも論じ、梧桐の葉の揺れる音に、秋の気配を感じる。

「紫府」は、太一神の住まうところ。任淵は、晋・葛洪『抱朴子』「祛惑」の「項曼都自言到天上、過紫府、金牀几晃晃昱昱（項曼都自ら言う、天上に到り、紫府を過れば、金の牀几晃晃昱昱たりと）」を引く。唐の開元元年に中書省を紫微省、中書舎人を紫微舎人と改めたことから、「紫府侍臣」は中書舎人として祀りに参加していた蘇軾を指すと思われる。「鳴玉」は、『礼記』に「行則鳴佩玉（行けば則ち佩玉鳴る）」とあり、君子は車に乗っているときは鸞和の声を聞き、歩いて行くときは腰に下げた玉を鳴らすとされる。

「霜台」は御史台の別称、「御史」は弾劾を司る。監察御史の韓川のこと。任淵注は、崔豹「御史箴」の「簡上霜

凝、筆端風起（簡上に霜凝り、筆端に風立つ）」を引く。韓川は勅命を受けて、詩を書いたと考えられる。その詩に黄庭堅らが次韻したのであろう。

「官燭」は、官吏が公務で使用するよう支給される蠟燭。お祀りは夜に行われるので、蝋燭をともして、詩を談義する。談論風発、議論はいつまでも終わらない。

「梧桐」の注に、任淵は王安石「五更」の「只聴虫声已無夢、五更桐葉強知秋（只だ虫声を聴いて已に夢無く、五更の桐葉に強いて秋を知る）」を引く。五更は、あけ方。梧桐の葉の揺れる音に、秋を知らされる。

其四

泰壇下瑞雲黄、　泰壇　瑞下りて雲は黄ばみ
雨師灑道塵香。　雨師　道を灑(あら)って塵は香し
便面猶承墜露、　便面　猶お墜露を承けるがごとく
金鉦半吐東牆。　金鉦　半ば東墻に吐く

祭壇に瑞祥が降りて黄金の雲が現れ、雨の神に道は洗い清められて塵も払われ、かぐわしい。甘露を受けるように扇をかざすと、金鉦（たたきがね）のような朝日が東の墻に姿をあらわした。

「泰壇」の注に任淵は、『礼記』「祭法」の「燔柴於泰壇、祭天也（泰壇に燔柴するは、天を祭るなり）」を引く。「燔柴」は、積んだ柴の上で玉帛や犠牲を焼くこと。「雲黄」の注には、『漢書』「郊祀志」に「武帝迎鼎至甘泉、至中山、晏温有黄雲焉（武帝鼎を迎えて甘泉に至り、中山に至りて、晏温に黄雲有り）」を引く。汾陰で民衆のため

に土地神を祀っていたら鼎が出現したという報告があり、その鼎を迎えるために甘泉へ出かけ、中山まで来ると空が晴れ渡って黄色い雲がわきおこった、という。「晏温」は、晴れて温かいこと。一説に「氤氳」と音義が近く、瑞雲が垂れるさま、という。

「雨師灑道塵香」の注には、後漢・班固「東都賦」の「雨師汎灑、風伯清塵（雨師汎灑（はんし）し、風伯塵を清む）」を引く。雨の神は道に水をまき、風の神は塵を払う、の意。また『新唐書』「狄仁傑伝」の「天子之行、風伯清塵、雨師灑道（天子の行は、風伯塵を清め、雨師道を灑う）」を引く。「雨師」は、古代の伝説中の雨を司る神。「風伯」は、神話中の風神。

「泰壇下瑞雲黄、雨師灑道塵香」の二句は、儀式のようす。風神や雨神に扮した人々が、祭壇で水をまいて清め、恵みの雨が降ったかのような演出をしているのではなかろうか。

「便面」は、扇のこと。「承墜露」の注には、後漢・班固「西都賦」に「抗仙掌以承露（仙掌を抗（あ）げて以て露を承く）」を引く。漢の武帝は、銅の仙人を建て、銅盤玉杯を捧げ持たせて、天からの仙露を受けようとした。

「金鉦」は楽器で、任淵は蘇軾「新城道中二首」其一の「嶺上晴雲披絮帽、樹頭初日掛銅鉦（嶺上 雲晴れて絮帽を披り、樹頭の初日 銅鉦を掛く）」を引く。晴れて峰には綿帽子のように雲がかかり、樹の梢に昇りはじめの太陽が銅鉦（たたきがね）のように掛かる、の意。「初日」は、昇りはじめた太陽。

「半吐」は、なかば姿を現すこと。任淵は杜甫「法鏡寺」の「洩雲蒙清晨、初日翳復吐（洩雲 清晨に蒙として、初日翳りて復た吐く）」を引く。うすい雲が朝の空を覆い、昇りはじめた太陽が翳ってまた姿を現す、の意。

「便面猶承墜露、金鉦半吐東牆」の二句は、いよいよ儀式も終盤となり、祈りの功あって恵みの雨が降り注ぎ、それを人々が受けるころ、夜があけて東のほうに太陽が昇り始める様子かと思われる。

以上、黄庭堅の「次韻韓川奉祠西太一宮四首」は、漢の武帝が泰一を祀った時の記録を随所に織り込みながら、武帝が不老長寿を願って祀りを行ったのに対し、いまの天子は民衆の豊年を祈って太一をお祀りし、屈原のような憂愁もないことを詠う。四首は夜中の儀式の開始から夜明けの終了までを描写し、楚辞に描かれていたような神の降臨の場面を真似ながらも、国家祭祀として洗練された様式化したものとなっていることをうかがわせ、韓川や蘇軾が官僚としてお役目を立派に果たしていることを称えるものとなっている。

三、蘇軾の「奉勅祭西太一和韓川韻四首」

蘇軾の「奉勅祭西太一和韓川韻四首」は、「奉勅」とあるので黄庭堅より先に公的な立場で作ったものかも知れないが、制作年について説が分かれているので、黄庭堅の詩を先に見た。太一に関する信仰や儀式の様子についてはすでに細かく検討したので、蘇軾の詩は内容を簡単に紹介する。

其一

聖主新除秘祝、　聖主　新たに秘祝を除し
侍臣來乞豊年。　侍臣　来りて豊年を乞う
壽宮神君欲至、　寿宮　神君至らんと欲し
夜半靈風肅然。　夜半　霊風粛然たり

天子さまは秘祝官を新たに任命され、侍臣が遣わされて豊年を祈る。神宮に神君（太一）が降臨せんとし、

夜半、（神仙の訪れを告げる）霊風が吹いた。

其二

玉璽親題御筆、　玉璽　親しく御筆を題し
金童来侍天香。　金童　来たりて天香に侍す
礼罷祝融参乗、　礼　罷み　祝融　参乗し
前駆已過衡湘。　前駆　已に衡湘を過ぐ

天子さまの勅命を受けて、金童（神仙の侍童＝行香使の韓川のこと）が天香をお守りする。礼が終わると祝融（火の神＝行香使のこと）が陪乗して、先導はすでに衡山と湘水を過ぎていった。

蘇軾の詩は、この二首が儀式の様子である。黄庭堅の詩に「九歌不取沈湘」とあったが、楚辞「九歌」は「東皇太一」のあとに「雲中君」「湘君」……と続く。これに似た組曲のようなものが壇上で展開されたと思われる。

其三

解剣独行残月、　剣を解き　独り残月に行き
披衣困臥清風。　衣を披り　困んで清風に臥す
夢蝶猶飛旅枕、　夢蝶　猶お旅枕に飛ぶがごとく
粥魚已響枯桐。　粥魚　已に枯桐に響く

役目を終えて剣をはずし、ひとり暁の残月を見ながら宿に帰り、衣をはおって疲れて微かな風に吹かれながら休む。旅枕にまだ胡蝶が夢の中を飛んでいるかのようだが、朝の粥が炊けたことを告げる木魚の音がもう響いている。

白居易「客中月」詩に「暁随残月行、夕与新月宿（暁に残月に随いて行き、夕に新月と与に宿る）」とある。西太一宮でのお祀りは「昏から明にかけて」行われるので、白居易の詩とは朝夕逆転して、暁の残月を見るころに宿へ帰るのである。

其四

陂水初含暁漾、　陂水　初めて暁漾を含み
稲花半作秋香。　稲花　半ば秋香を作す
皂蓋却迎朝日、　皂蓋　却って朝日を迎え
紅雲正繞宮牆。　紅雲　正に宮牆を繞る

池塘の水は暁の澄んだ色を見せはじめ、稲の花が秋香（金木犀）のように開きはじめる。官吏は黒傘をかざして朝日を迎え、（神仙のいる処に現れる）紅雲が神宮（西太一宮）の牆をとりまく。

「稲花」とあるが、稲の花は朝の三十分ほど咲いて受粉し、およそ三十日で実（米）がなる。お祀りが無事に終り、朝日に照らされて稲の花が金木犀の花のように輝いている。風が吹いて「稲花が香る」という表現は、唐詩に

いくつか用例が見える。

蘇軾の詩は、後半二首は祀りが終わった後の様子で、祈りが届いて雨が降り、豊作となるであろうことを、あらかじめお祝いする。

張耒の「和子瞻西太一宮祠二首」は、蘇軾四首の前二首に和した部分が残っている。やや遠くから儀式を眺めていたような印象があり、黄庭堅や蘇軾ほど具体的な描写になっていない。

其一

太一祥儲世世、　太一の祥儲　世世たり
祠宮歳事年年。　祠宮の歳事　年年たり
絳節霓旌何処、　絳節　霓旌　何処にかある
松庭玉座蕭然。　松庭　玉座　蕭然たり

其二

玉罍清晨薦酒、　玉罍　清晨に酒を薦め
天風静夜飄香。　天風　静夜に香りを飄わす
鳳吹管截孤竹、　鳳吹　管は孤竹を截り
琴弦曲奏瀟湘。　琴弦　曲は瀟湘を奏す

もとの韓川の詩は残っていないが、次韻した蘇軾・黄庭堅・張耒の詩は韻字がそろっていて、内容からも同じ時

に同じ場所で同じ体験を共有して、作られたものと考えられる。

しかし個別に詩人の詩を見た場合に、制作の背景について限定することが難しいこともあり、孔凡礼『蘇軾年譜』[11]では「奉勅祭西太一和韓川韻四首」を四月の作として、「次韻朱光庭初夏。奉勅祭西太一、和韓川韻」とある。清・王文誥輯注『蘇軾詩集』[12]（編年）を踏襲しているからで、巻二十七に「次韻朱光庭初夏」「次韻朱光庭喜雨」の二詩に続いて、「奉勅祭西太一和韓川韻四首」があると繫年の根拠を記している。

だが王文誥『蘇軾詩集』では、「奉勅祭西太一和韓川韻四首」其一「侍臣來乞豊年」句の査慎行注に、「龐元英文昌雑録、祠部毎歳立春、祭東太一宮、立夏立冬祭中太一宮、立秋祭西太一宮」を引いて、立秋に西太一宮を祭ると記しているので、見落としたのであろう。「次韻朱光庭初夏」「次韻朱光庭喜雨」は、初夏に雨が降ったことを喜ぶ詩。もちろん旧暦なので、初夏は四月である。立秋は七月。

鄭永暁『黄庭堅年譜新編』には、「七月初め、蘇軾・韓川らと都の西南郊外の西太一宮を遊覧し、王安石の作った題壁詩二首を見た。この時、王安石はすでに亡くなっており、王安石が創立した新法もほとんどすべて廃止されていて、感慨ひとしおであり、そこで追和する詩数首を作った」[13]とある。王文誥『蘇軾詩集』にも、「奉勅祭西太一和韓川韻四首」の次に「西太一見王荊公旧詩、偶次其韻二首」を載せる。これを孔凡礼『蘇軾年譜』では、九月の作とする[14]。

西太一宮に、王安石が題壁した詩があって、それに蘇軾と黄庭堅が次韻したのである。これまで見てきたように、蘇軾らは西太一宮に「遊覧」に行ったのではなく、立秋の日に西太一宮のお祀りにお役目として参加したのであり、おそらく儀式がおわって朝となり、都へもどる前に、王安石の題壁詩に和したのであろう。諸篇の制作の時期を整理すると、次のようになると思われる。

四月、蘇軾「次韻朱光庭初夏」「次韻朱光庭喜雨」

七月立秋、西太一宮を祀る。

韓川「奉祠西太一宮四首」（散逸）

蘇軾「奉勅祭西太一和韓川韻四首」

黄庭堅「次韻韓川奉祠西太一宮四首」

張耒「和子瞻西太一宮祠二首」

七月、西太一宮で王安石「題西太乙宮壁二首」を見る。

蘇軾「西太一見王荊公旧詩、偶次其韻二首」

黄庭堅「次韻王荊公題西太乙宮壁二首」「有懐半山老人再次韻二首」

九月十二日、蘇軾、翰林学士となる。

四、王安石の西太一宮の詩をめぐって

王安石の「題西太一宮壁二首」は、三十年前に訪れた西太一宮を、再び訪れての感興を詠う。

其一

柳葉鳴蜩緑暗、　柳葉　鳴蜩　緑暗く

荷花落日紅酣。　荷花　落日　紅酣なり

三十六陂春水、　三十六陂　春の水
白頭想見江南。　白頭　江南を想見す

其二

三十年前此地、　三十年前　此の地
父兄持我東西。　父兄　我を持して東西す
今日重来白首、　今日　重ねて来れば白首
欲尋陳迹都迷。　陳迹を尋ねんと欲すれど都て迷う

王安石は、撫州臨川（今の江西省）の人。地方官だった父と初めて都に来たのが景祐三年（一〇三六）、十六歳の時。王安石が進士に合格したのが慶暦二年（一〇四二）、最初に西太一宮を訪れたのは、まだ登第する前のことである。官途についてからは、家族も多かったため、中央官僚より給料がよかった地方官を歴任するが、政治改革を訴える上奏文が神宗の目にとまり、翰林学士に抜擢され、熙寧元年（一〇六八）四月、中央政界にもどった。四十八歳。前回訪れてからほぼ三十年後であり[15]、詩中の内容と符合する。

「三十六陂」とあるのは、都を東西に流れる汴河にある堤防のこと。神宗の元豊二年（一〇七九）に、水不足解消のために洛水と汴河をつなぐ工事をした。新法による改革の成果の一つである。

西太一宮が建てられた八角鎮は、都城の西の順天門外にある。長年親しんできた江南の春の水辺の風景が、目の前の風景に重なる。しかし若い頃に連れてきてくれた父はもういないし、自分もすっかり白髪頭になってしまった。過去と現在の時間の対比、柳の緑とハスの赤の色彩の対比、北方の都汴京と地方官として過ごした江南の空間の

対比。濃く繁る柳の枝の蔭で、短い命を惜しむかのように鳴くセミと、沈みゆく夕陽に染められるハスの花。「酣」は、最盛期をすぎて衰退に向かうポイントをいう。思い出の中の春の江南ではなく、目の前に広がるのは夏の終わりの風景である。無限の時間の中で有限の命を尽くそうとする可憐な虫や花と、老いてゆく自分、若い頃の自分を連れてきてくれた、すでに亡くなった父。河の流れのように時は移ろい、詩人の心は水のように澄んで、白く、灰のようになってゆく。

感傷的に読み過ぎだろうか。王安石には「西太一宮楼」もある。

草際芙蕖零落、　草際　芙蕖　零落し
水辺楊柳欹斜。　水辺　楊柳　欹斜す
日暮炊煙孤起、　日暮れて炊煙孤り起ち
不知魚網誰家。　知らず　魚網　誰が家ぞ

ハスの花は枯れ、夕餉の仕度に置きっぱなしにされている漁の網、水村の風景を詠っている。同じ時の作であるとすれば、「題西太一宮壁二首」のハスが「紅酣」だったのは「落日」に照らされていたからで、その太陽が沈むとそこに見えたのは枯れた姿、季節は夏の終わりではなく秋の始まり、すなわち立秋ということになる。王安石には「西太一宮立秋祝文」（『臨川文集』巻四十六）も残っており、西太一宮へ行ったのはやはり祭祀のためだったかも知れない[16]。

王安石の題壁詩を見て、蘇軾は「此れ老野狐精なり」と感心し、追和の詩を作ったという（宋・蔡絛『西清詩

話』）。黄庭堅もまた次韻した。

蘇軾「西太一見王荊公旧詩偶次其韻二首」
秋早川原浄麗、雨余風日清酣、従此帰耕剣外、何人送我池南。
但有樽中若下、何須墓上征西。聞道烏衣巷口、而今煙草萋迷。

黄庭堅「次韻王荊公題西太乙宮壁二首」
風急啼烏未了、雨来戦蟻方酣、真是真非安在、人間北看成南。
晩風池蓮香度、暁日官槐影西。白下長干夢到、青門紫曲塵迷。

この時、王安石はもう世にいない。倉田淳之助氏は黄庭堅の一首めについて、「前二句は目前の景であっても、風雨による烏蟻の混乱を述べ、後に是非定め難いことをいうのは、熙寧・元豊の間に、王安石が新法政治を行ない、人民が動揺し、元祐の今、新法が廃止された。その波瀾を指して詠じたものと思われる」[17]という。

宋・蔡絛『西清詩話』には「元祐間、東坡奉祠西太一宮、見公旧題両絶、注目久之、曰『此老野狐精也』、遂次其韻」とあり、蘇軾が西太一宮に奉祠した時に、かつて王安石が題壁した絶句二首を見たと、制作の経緯が明確に記録されている。蔡絛は、徽宗朝で新法を推進し旧法党に大弾圧を加えた蔡京の子である。

しかし同じエピソードが、南宋の何汶の『竹荘詩話』になると、「蘇子瞻作翰林日、因休沐、邀門下士西至太乙宮、見王荊公旧題六言云云（蘇軾が翰林学士だった頃、休日に門下生を連れて西太一宮へ行き、王安石の旧題壁六

言詩を見た…）」となっていて、これを資料として、孔凡礼『蘇軾年譜』は九月に、「邀黄庭堅等至太乙宮、見王安石旧題六言、次韻」とするのである。九月とするのは、蘇軾が翰林学士になったのが九月十二日だからで、孔凡礼『蘇軾年譜』では「奉勅祭西太一和韓川韻四首」を四月に繋年していたので、西太一宮に二回行ったことになる。[18]九月は旧暦では秋の終わりになり、蘇軾詩の「秋早川原浄麗」句の情景ともずれる。

詩は残ったけれども、詩を作った背景は容易に忘れられ、興味深い佳話だけが増幅して伝えられたのである。

おわりに

王安石が残した題壁詩を見て、よほど感慨深かったのか、黄庭堅は「有懐半山老人再次韻二首」も作った。「次韻王荊公題西太乙宮壁二首」と同じ韻を用いている。其一に云う、

短世風驚雨過、　短世　風驚き　雨過ぎ
成功夢迷酒酣。　成功　夢は迷い　酒は酣
草玄不妨準易、　玄を草する易に準（なら）うを妨げず
論詩終近周南。　詩を論ずれば終に周南に近し

その短い人生は、風が吹き雨が通り過ぎるようなものだった。政治的な成功は、夢の中か酒に酔ったようなものだった。しかし学問は、漢の楊雄が『周易』にならって『大玄』を作ったようであり、詩について言えば、「周南」に近いすぐれたものである。

王安石は科挙による人材登用だけでなく、大学で学生を教育して人材を国家が育成する方法を模索し、学舎を増やしただけでなく、教科書的なものも編纂した。『周礼』『詩経』『書経』に対する注釈書『三経新義』を作り、学官に立てた（いま伝わるのは『周礼新義』のみ）。三句めは、このことを言う。ちなみに周邦彦は、拡充された太学三舎生の一人として「汴都賦」を献上したのであった。「周南」は『詩経』国風の第一であり、詩風がこれに近いというのは、これ以上ない誉め言葉である。

哲宗の元祐元年（一〇八六）秋、王安石が熱心に推し進めた新法は次々に廃止され、都から離れた隠棲の地で失意のうちに王安石が亡くなって半年ほどたっていた。黄庭堅は、政治状況がどう変化しようとも、王安石の学問と詩は確固として残った、とその死を悼み、魂を慰めた。

その後また政治状況は変化して、黄庭堅も旧法党大弾圧の時代に辺境の地で亡くなり、著作は発行禁止になった。蘇軾も同じ。しかしどのように弾圧しようとも、二人の学問と詩もまた、確固として残ったのである。

注

（1）張耒（一〇五四～一一一四）、字は文潜。蘇軾の門下で、黄庭堅・晁補之・秦観とともに「蘇門四学士」と称される。神宗熙寧六年（一〇七三）の進士。黄庭堅には、「次韻答張文潜恵寄」「奉和文潜贈答篇末多以見及以既見君子云胡不喜為韻」「以団茶洮州緑石研贈無咎文潜」「次韻文潜同遊王舎人園」など、張耒と応酬した詩が多数ある。元豊元年（一〇七八）に寿安尉となり、七年に咸平丞に遷る。哲宗元祐元年（一〇八六）当時、秘書省正字・著作佐郎に任命され、著作郎と史院検討官を兼任した。蘇軾や黄庭堅と同じく新旧の党争に巻き込まれ、旧法党として徽宗が即位すると黄州通判となり、崇寧元年（一一〇二）には隠退して多くの門人を指導し、宛丘先生と呼ばれた。

（2）藤野岩友『楚辞（漢詩選3）』、集英社、一九九六年。初版は、集英社漢詩大系、一九六七年。

（3）以下、九宮貴神と十神太一については、坂出祥伸「北宋における十神太一と九宮貴神」（『関西大学中国文学会紀要』第七号、一九七八年、五二～七〇頁）、による。
（4）沈括撰・梅原郁訳注『夢渓筆談1』、平凡社、一九七八年、七七頁より。
（5）清・宋継郊撰、王晟・李景文・劉璞玉点校『東京志略』、十七「神祠」の「西太一宮」項、河南大学出版社、一九九九年、六一八～六二一頁、参照。引用中、「慶歴」は「慶暦」に改めた。
（6）三田村圭子「唐・宋代の青詞作成の担い手たち」（『専修人文論集』九七号、二〇一五年、二七～四四頁）、参照。
（7）孔凡礼『蘇軾年譜』（中華書局、一九九八年）、鄭永暁『黄庭堅年譜新編』（社会科学文献出版社、一九九七年）による。
（8）黄庭堅の詩には、晩年の弟子である任淵が注した『山谷詩集注』二十巻がある。その現存するもっとも古いテキストは、日本の市立米沢図書館が所蔵する南宋の刻本であるが、本稿では『黄庭堅詩集注』（中華書局、二〇〇三年）を底本とする。『山谷詩集注』については、別稿「『山谷詩集注』を読むために」（慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』第48号、二〇一六年、六三～八九頁）、参照。
（9）班固撰、狩野直禎・西脇常記注『漢書郊祀志』、平凡社、一九八七年、参照。
（10）狩野直禎・西脇常記注『漢書郊祀志』、一一七～一二八頁。
（11）孔凡礼『蘇軾年譜』、七一八頁。
（12）清・王文誥輯注、孔凡礼点校『蘇軾詩集』、中華書局、一九八二年。
（13）鄭永暁『黄庭堅年譜新編』、一六九頁。
（14）孔凡礼『蘇軾年譜』、七四二頁。
（15）李徳身『王安石詩文繫年』、陝西人民教育出版社、一九八七年、参照。
（16）「中太一宮立冬祝文」「九宮貴神祝文」も同じく『臨川文集』巻四十六にある。
（17）倉田淳之助注『黄庭堅』、漢詩選12、一九九七年（初版は漢詩大系18、一九六七年）、集英社、一一六頁。
（18）清・王文誥輯注『蘇軾詩集』（編年）は、巻二十七に「次韻朱光庭初夏」「次韻朱光庭喜雨」「奉勅祭西太一和韓川韻

四首」「西太一見王荊公旧詩偶次其韻二首」と並べる。